

# イシグロさん新作 技術革新の不安と未来



ロンドンの自宅から、オンラインでインタビューに答えるカズオ・イシグロさん

イギリスの作家カズオ・イシグロさんが2日、6年ぶりの新作小説『クララとお日さま』（早川書房、土屋政雄訳）を世界同日で発表した。2017年にノーベル文学賞を受賞してから初めての新作となる。科学技術がもたらす不安や深刻化する格差など、現代社会への問題意識が映り込む。

物語の舞台は近未来のアメリカ。ティーンエイジャーの成長を見守る友人役として製造された人工知能（AI）搭載の人型ロボット、クララの視点で物語が進む。高い観察力を備えたクララは、彼女を購入了した一家にすぐに溶け込むが、家族が抱える秘密が明らかになるにつれ、技術革新が生んだグロテスクな現実が前景化する。

イシグロさんは、ロンドンの自宅からオンラインで日本メディアによる合同インタビューに応じた。元々、AIには大きな関心があり、「クララには人間が持つ孤独や愛がわからないので、一生懸命それらを理解しようとする。AIを語り手とすることで、かえって人間とは何かが浮き彫りになる」と考えたという。

データを移し替えれば人間の複製も理論上可能となったSFの未来。人間の尊厳や代替不可能性が危ぶまれる中で、「心」は存在するのかと

ノーベル賞後初6年ぶり

## 孤独・愛・人間とは——人型AIの語りで



いう根源的な問いが立ち上がる。登場人物の科学者は言う。〈誰の中にも探りきれない何かがあるのか、唯一無二で、他へ移しえない何かがあるのか、どこかで信じている。だが、実際にはそんなものはないんだ〉

しかし本当にそうだろうか、とイシグロさんは問いかける。「人間の体のどこを探しても魂はなかった、という作中の科学者に対しての私の答えは、『探している場所が違っただけじゃないですか』。ある人の特別さとは、周囲の人々がその人を愛し、唯一無二だと感じる気持ちの中にあるのではないかと。

### 格差・分断の影も

世界で広がる格差と分断も物語に影を落とす。クララを取り巻く人間の子どもたちは、「向上処置」と呼ばれる遺伝子操作を受けるかどうかによって、将来得られる教育や経済的恩恵が大きく違う。念頭にあったのは、ゲノム編集技術「クリスパー・キャス9」だ。遺伝子を自由に改変できる技術で、昨年のノーベル化学賞を受賞。がんや食糧問題の解決に期待がかかる一方、知性や運動能力が高い子どもをデザインできてしま

うことに倫理的な懸念もある。「この技術がメリトクラシー（能力主義）と掛け合わさったときに到来するのは、南アフリカのアパルトヘイトのような、かなり残酷な世界です」

温かみのある筆致で描き出されるどこかノスタルジックで美しい世界と、その背景に潜む不釣り合いなほど殺伐とした現実。臓器提供のためにクローン技術で生まれてきた子どもたちの運命を描いた代表作『わたしを離さないで』（2005年）に連なる長編といえる。

### 現代への戸惑い

ただ、これまで以上に現代社会への批評性がうかがえるのは、自由や平等といった民主主義的価値が次々とほころんでいく時代への戸惑いがないんだ結果だという。「かつて人々は共産革命を恐れ、格差に対する警戒心を持っていたが、冷戦崩壊以降、持つ者と持たざる者の格差は開き続けている。よくないことと分かっているにもかかわらず、どうも現実には正そうという力が存在しない」

本作は、そこに注意を向ける試みだったと明かす。「警鐘を鳴らすなら、新聞エッセーやドキュメンタリーのほうがふさわしい。でも小説には、読者に登場人物の立場にたち、同じ気持ちになってもらうことができる」。小説を書かせるのは、そんな思いだ。

この作品を執筆中に、ノーベル文学賞を受けた。いつも通りに書き終えたはず、と話しつつ、こう付け加えた。「プレッシャーを感じていたとすれば、次作に表れるかもしれません」（板垣麻衣子）